

能「安宅」

源義経主従一行は、頼朝の追及を逃れるため山伏姿に様変えて藤原家を頼りに奥州へと旅をしている。頼朝は国々に関所を増設し義経を捕らえようと、加賀国・安宅にも新関が設けられ関守・富樫は山伏に限り取り調べている。関に義経一行が差し掛かり、義経を守るべく武蔵坊弁慶が智略をめぐらす。数々の危機を乗り越え一行は陸奥の国へと下ってゆくのであった。

作者 観世小次郎信光 素材 「義経記」 場所 加賀国 安宅(現・石川県小松市安宅町)
季節 二月 分類 4 番目物 現在物

登場人物

シテ	武蔵坊弁慶	兜巾、厚板、白大口、又は半切、水衣、篠懸、刺高数珠、山伏扇、巻物
子方	源義経	兜巾、厚板、白大口、水衣、篠懸、中啓 --- 笈、男笠
ツレ	義経の郎等	兜巾、厚板、白大口、縷水衣、篠懸、刺高数珠、中啓
アイ	剛力	兜巾、厚板、括袴、脚絆
ワキ	富樫某	梨子打鳥帽子、白鉢巻、厚板、直垂上下込大口、中啓、太刀
アイ	従者	厚板、狂言袴

～安宅の関での物語り

ワキ「かやうに候ふ者は。加賀の国富樫の何某にて候。扱も朝頼・義経御仲不和にならせ給ふにより。判官殿十二人の作り山伏となつて。奥へ御下向の由頼朝きこしめし及ばれ。国々に新関を立てて。山伏を固く簡み申せとの御事にて候。さる間此処をば某承って山伏を留め申し候。今日も固く申しつけばやと存じ候。いかに誰かある 狂言「御前に候
ワキ「今日も山伏の御通りあらば此方へ申し候へ 狂言「畏つて候

～旅姿の義経一行

一行「旅の衣は篠懸の。旅のころもは。篠懸の露けき袖や志をるらん。鴻門楯破れ都の外の旅衣。日もはるばるの越路の末。思ひやるこそ遥なれ シテ「さて御供の人々には ツレ「伊勢の三郎駿河の次郎。片岡増尾常陸坊 シテ「弁慶は先達の姿となりて ツレ「主従以上十二人。いまだ習はぬ旅姿。袖の篠懸露霜を。今日分けそめていつまでの。限もいさや白雪の。越路の春に急ぐなり 「時しも頃は二月の。時しも頃は二月の。きさらぎの十日の夜月の都を立ち出でて。これやこの。行くも復るも別れては。行くも復るも別れては。知るも知らぬも。逢坂の山隠す。霞ぞ春は。恨めしき霞ぞ春はうらめしき。「波路はるかに行くふねの。波路遥かに行く舟の。海津の浦に着きにけり。志ののめ早く明けゆけば浅茅色づく有乳山。「氣比の海。宮居久しき神垣や。松の木芽山。なほ行く先に見えたるは。柚山人の板取。河瀬の水の麻生津や。末は三国の湊なる。芦の篠原波よせて。靡く嵐の烈しきは。花の安宅に着きにけり。花の安宅につきにけり。

～安宅の新関を知り弁慶に行く末を委ねる義経

子方「いかに弁慶 シテ「御前に候 子方「只今・旅人の申して通りつる事を聞いてあるか
シテ「いや何とも承らず候 子方「安宅の湊に新関を立てて。山伏を固く簡むとこそ申しつれ
シテ「言語道断の御事にて候ふものかな。さては御下向を存じて立てたる関と存じ候。これはゆゑしき御大事にて候。まづ此傍にて暫く御談合あらうずるにて候。これは一大事の御事にて候ふ間。皆々心中の通を御意見御申しあらうずるにて候
ツレ「我等が心中は何程のこの候ふべき。たゞ打ち破つて御通あれかしと存じ候
シテ「暫らく。仰の如くこの関一所打ち破つて御通あらうずるは易き事にて候へども。御出で候はんずる行末が御大事にて候。ただ何ともして無異の義が然るべからうずると存じ候
子方「ともかくも弁慶はからひ候へ シテ「恐れ多き申事にて候へども。御篠懸をのけられ。あの剛力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ。御笠を深々と召され。如何にもくたびれたる御体にて。我等より後に引きさがって御通り候はば。なかなか人は思ひ寄り申すまじきと存じ候

子方「げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取り候へ シテ「畏まって候。さらば御立あらうずるにて候。実にや紅は園生に植ゑても隠なし 「剛力にはよも目をかけじと。御篠懸を脱ぎかへて。麻の衣を御身にまとひ 「あの剛力が負ひたる笈を 「義経取つて肩に掛け 「笈の上には雨皮肩箱取りつけて 「綾菅笠にて顔をかくし 「金剛杖にすがり 「足痛げなる剛力にて地「よろよろとして歩み給ふ御有様ぞ痛はしき
シテ「我等より後に引き下って御出あらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ ツレ「承り候

～関に差し掛かった一行を、留める富樫

ワキ「のうのう客僧達これは関にて候 シテ「承り候。これは南都東大寺建立の為に。国々へ客僧をつかはされ候。北陸道をば此の客僧承って罷り通り候。まづ勸に御入り候へ ワキ「勸には参らうずるにて候去りながら。これは山伏達に限って留め申す関にて候 シテ「さて其の謂は候
ワキ「さん候頼朝義経御仲不和にならせ給ふにより。判官殿は奥秀衡を頼み給ひ。十二人の作山伏となつて。御下向の由其聞え候ふ間。国々に新関を立てて。山伏を固く簡み申せとの御事にて候
シテ「言語道断。かかる不祥なる所へ来かかつて候ふものかな。此上は力及ばぬ事。さらば最期の勤を始めて。尋常に誅せられうずるにて候。皆々近う渡り候へ ツレ「承り候

～様々に苦難を乗り越える一行

「いでいで最期の勤を始めん。それ山伏といつば。役の優婆塞の行義を受け 「その身は不動明王の尊容を象り 「兜巾といつば五智の宝冠なり 「十二因縁の襷を据ゑて戴き 「九会曼荼羅の柿の篠懸 「胎蔵黒色のはばきを穿き 「さて又八目の藁鞋は 「八葉の蓮華を踏まへたり
「出で入る息に阿吽の二字を唱へ 「即心即仏の山伏を 「こゝにて討ちとめ給はんこと 「明王の照覧測り難う 「熊野権現の御罰の当らん事 「たちどころに於いて 「疑あるべからず
「オンナビラウンケンと珠数さらさらとおし揉めば

シテ「もとより勸進帳は有らばこそ。笈の中より往来の巻物一卷取り出し。勸進帳と名づけつつ。高らかにこそ読み上げけれ。それつらつらつら
「惟んみれば大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隠れ生死長夜の長き夢。驚かすべき人もなし。ここに中頃帝おはします。御名をば。聖武皇帝と。名づけ奉り最愛の。夫人に別れ。恋慕息みがたく。涕泣眼にあらく。涙玉を貫く思ひを。善途に翻して廬遮那仏を建立す。かほどの霊場の。絶えなん事を悲みて。俊乗房重源。諸国を勸進す。一紙半銭の。奉財の輩は。この世にては無比の楽に誇り当来にては。数千蓮華の上に坐せん帰命稽首。敬って白す と天も響けと読み上げたり

狂言「如何に申し上げ候。判官殿の御通り候 ワキ「いかに是なる剛力とまれとこそ

ツレ「すは我が君をあやしむるは。一期の浮沈極りぬと。みな一同に立ち帰る

シテ「ああ暫らく。あわてて事を為損ずな。 ～略～ 腹立や日高くは。能登の國まで指さうずると思ひつるに。僅かの笈を負うて後に下ればこそ人も怪しむれ。総じて此程。につくし憎しと思ひつるに。いで物見せてくれんとて。金剛杖をおつ取って散々に打ちやくす通れとこそ

ワキ「近頃誤りて候。はやはや通り給へ

シテ「いかに申し上げ候。さても唯今は余りに難義に候ひし程に。不思議の働きを仕り候ふ事。これと申すに君の御運尽きさせ給ふにより。今弁慶が杖にも当らせ給ふと思へば。いよいよあさましうこそ候へ 子方「さては悪しくも心得ぬと存ず。いかに弁慶。さても唯今の機転更に凡慮より為すわざにあらず。唯天の御加護とこそ思へ。関の者ども我を怪しめ。生涯限ありつる所に。とかくの是非をば問答はずして。ただ真の下人の如く。散々に打つて我を助くる。これ弁慶が謀にあらず八幡の 地「御託宣かと思へば忝くぞおぼゆる

地「それ世は末世に及ぶといへども。日月は未だ地に墜ち給はず。たとひ如何なる方便なりとも。正しき主君を打つ杖の天罰に当らぬことやあるべき

子方「げにや視在の果を見て過去未来を知ると云ふこと

地「今に知られて身の上に。憂き年月の二月や。下の十日の今日の難を遁れつるこそ不思議なれ

子方「たださながらに十余人

地「夢の覚めたる心地して。互に面を合はせつつ。泣くばかりなる有様かな

然るに義経。弓馬の家に生れ来て。命を頼朝に奉り。屍を西海の波に沈め。山野海岸に起き臥し
明かす武士の。鎧の袖枕。片敷く隙もなみの上。或時は舟に浮み。風波に身を任せ。ある時は山
脊の。馬蹄も見えぬ雪の中に。海少しある夕波の立ちくる音や須磨明石の。とかく三年の程もな
く。敵を亡ぼし靡く世の。その忠勤も徒に。なり果つる此の身の。そも何といへる因果ぞや

子方「げにや思ふ事。叶はねばこそ憂き世なれと 地「知れどもさすがなほ。思ひ返せば梓弓の。

直なる。人は苦しみて。讒臣は。弥増に世に在りて。遼遠東南の雲を起し。西北の雪霜に。責め
られ埋る憂き身を。理り給ふべきなるにただ世には。神も。仏も在しまさぬかや。恨めしの浮世
やあら恨めしのうき世や

～富樫の来訪

シテ「げにげにこれも心得たり。人の情の盃に。受けて心をとらんとや。これにつきてもなほなほ

人に。心な昏れそ呉織 地「あやしめらるな面々と。弁慶に諫められて。この山陰の一宿りに。

さらりと円居して。所も山路の菊の酒を飲まうよ シテ「おもしろや山水に 地「面白や山水に。

盃を浮かめては。流に牽かるる曲水の。手先づ遮る袖ふれていざや舞を舞はうよ。もとより弁慶
は。三塔の遊僧。舞延年の時の若。これなる山水の。落ちて巖に響くこそ。鳴るは瀧の水 男舞

地「日は照るとも。絶えず滔たり。絶えずとうたりとく疾く立てや。手束弓の。心ゆるすな。関守

の人々。暇申してさらばよとて。笈をおっ取り。肩にうち懸け。虎の尾を踏み毒蛇の口を。脱れ
たる心地して。陸奥の国へぞ。下りける

※ 詞章には省略箇所があります。

